

はしがき

アイヌ民族の話をする前に、多くの読者にとってより身近なネイション、ここでは日本人について少し考えてみたいと思います。わたくしごとになりますが、筆者がナショナル・アイデンティティ（あるいは民族アイデンティティ）を初めて強く意識したのは10代でオーストラリアに留学したときでした。その頃のシドニーは差別意識が強く頻繁に敵意を向けられました。たとえば、フェリー乗り場でおじいさんに連れられた愛らしい幼児に「日本に帰れ」と言ってポップコーンを投げつけられたり、電車の中で女子高生の集団に罵倒されてリンゴの食べかすを投げつけられたりといったふうに。そのように、一人の人間である前に所属集団によって判断される経験の多くあったことが、自身の帰属について考えるきっかけとなりました。わたしという人間は、その多くが見たことも会ったこともない多くの人たちからなる「日本人」の一員であり、それら見知らぬ「同胞」とある種の運命を共有する存在なのだ。

しかし、筆者は何ゆえに日本人集団に所属しているといえるのでしょうか。そもそも「日本人」とはどのようなまとまりのことでしょうか？日本人集団のような国民共同体のことを「ネイション nation」といいます。ネイション研究においてネイションとは、別様ではありえない宿命的な共同体ではなく、歴史的につくられた構造物と説明されます。すなわちネイションとは、古代から脈々と引き継がれてきた何らかのエッセンス（〇〇人らしさ）を生得的に備えた者たちの集まりなのではなく、「国家」が重要な役割を果たすようになった近代において大きな一つの共同体として創造されたものなのです。それにもかかわらず、ネイションはしばしば古代から脈々と引き継がれてきた普遍的なもののように感じられ、ゆえに場合によっては命を投げ捨てられるほどの原初的な愛着を人々に引き起こすものです。

命を投げ捨てるほどかは別として、筆者も日本人集団、あるいは日本社会

に「原初的な」愛着を抱いています。筆者は20代の頃にはアメリカ社会で学業や就業をし、アメリカ社会にも共感し愛着をいただいていた。それでもピルグリム・ファーザーズや独立宣言や南北戦争といった「アメリカ人の歴史」に連なっている感覚はまったくありませんでした。他方、神話から始まるいわゆる「日本人の歴史」には連なっているように感じられました。「日本人の歴史」に責任を持ち、またそれを形成する者という意識を、——緩やかではありますが他のネーションへの思い入れと比較すると明確に強く——もっていたことに気がきました。おそらく読者のみなさんも、他のネーションへの思い入れと比較してみると、自身が日本、あるいは特定のネーションに「原初的な」愛着を有していることに気付かれるのではないのでしょうか。

さて、「国民」と「民族」は近接した概念であり、英語ではどちらも「ネーション nation」です。どちらも「国民国家」という近代的な社会制度と関係が深く、人間社会が歴史的に構築してきた想像上の共同体だと考えられています。あるいは雑多な世界を理解しやすくするための分類枠組み（カテゴリー）とも説明されます。「日本人」の場合と同様「アイヌ民族」も、古代から脈々と引き継がれてきた何らかのエッセンス（アイヌ民族らしさ）を生得的に備えた者たちの集まりではなく、近代において作られた想像上の共同体です。言い換えると、「アイヌ民族」のエッセンスは、古代から引き継がれてきた生物学的あるいは文化的特徴なのではなく、その時々を生きる者たちの集合的な思い入れなのです。

これまでのアイヌ研究においては、「アイヌ民族」をこのように想像の共同体やカテゴリーなどと捉える構築主義的な分析があまりなされてきませんでした。それゆえに、「アイヌ民族」を古代から引き継がれてきた生物学的あるいは文化的特徴の側面から捉えようとする従来の傾向が払しょくされず、集合的な思い入れとしての「アイヌ民族」のすがたを明示的に提示することができてこなかったように思われます。結果として、アイヌと和人の客観的な差異が激減する近現代のアイヌの人々の、主観的な民族アイデンティティと社会の承認のギャップを埋めるための十分な理論的下支えを提供できずに

いるように思われます。

このような言い方が適切であるかわからないのですが、わたしは（北海道在住の）アイヌの方々にお会いすると、懐かしい北海道の人たち、という印象を受けます。独特のイントネーションと醸し出す雰囲気、山菜取りの話題が多いことなども、北海道の親戚や知人（和人）とよく似ています。暮らし方も、寒冷地の北海道らしい家のつくりや住まい方です。そのように、アイヌの方からは、北海道の人の空気を感じることはあっても、異民族の空気を感じたことはほとんどありません。従来からの「民族」概念に依れば、北海道の人を「アイヌ民族」や「和人」という民族カテゴリーで分類することには何ら意味がないことのようにさえ思えてきます。

ところが、その民族カテゴリーによる分類は驚くほど有効なのです。アイヌの方々は、しばしば何の躊躇もなく、和人とは異なる「アイヌ」としての自己意識を明確に表明します（だからここで「アイヌの方々」と呼んでいるわけですが）。精力的に文化伝承活動などを実践している人はもちろんのこと、「アイヌだけどアイヌ文化は知らない」「アイヌであることを意識することはあまりない」という人も、——生き方はどうあれ——まさに自身を「アイヌ民族」に連なる者と位置付けているわけです。そういう主観的な信念が一定量存在する限り、「アイヌ民族」という想像の共同体は存在し続けるし、すなわち北海道の人を「アイヌ民族」か「和人」かという民族カテゴリーで分類することは実に妥当なのです。本書では、このような視点から「アイヌ民族」を分析します。

本書に登場するアイヌの主人公たちも、——筆者と同様——他者との関わりをきっかけとして民族アイデンティティを意識しはじめます。そして、その民族アイデンティティは、理性的な選択というよりも、情緒的・運命的な信念に基づいています。「アイヌ民族は消滅する」「アイヌ人はもういない」と言われても、自身が「和人の歴史」ではなく「アイヌ民族の歴史」に連なっているという感覚を理性によって変えることはできません。彼らは「アイヌ民族の歴史」にコミットする者たちであり、それが本書ではイオマンテ（祭

祀) というかたちで表出されます。(ちなみに、ここではアイヌの「日本人」アイデンティティについては触れていませんが、近現代のアイヌは「アイヌ民族」であると同時に「日本人」でもあります)。

本書を手にとってくださったみなさんのなかには、これまでアイヌ民族についてあまり見聞きしたことがない人もいると思います。よってアイヌ民族のはなしを、何か特殊な遠いことのように思われるかもしれません。しかし、本書が描き出そうとしている主人公たちの「アイヌ民族」へのこだわりは、遠い見知らぬ世界のことではなく、若い頃の筆者のように自身の帰属がクローズアップされる局面において誰もが多かれ少なかれ経験しうる感覚です。本書を通して、それぞれの時代の主人公のおかれたその時々々の社会状況を追体験し、自分事に置き換えて、彼らの「アイヌ民族」に対する「原初的な」愛着について思いをはせていただけたら幸甚です。

目次／白老における「アイヌ民族」の変容
——イオマンテにみる神官機能の系譜——

はしがき (i)

序 章	3
1 本書の目的と方法.....	3
1 目的：断続的歴史観から連続的歴史観へ (3)	
2 位置づけ：新しい「民族」理解への試み (5)	
3 方法：白老とイオマンテ、4つの時代区分と8人の主人公 (11)	
2 アイヌ民族について.....	15
1 人口と分布 (15)	
2 生活実態調査にみる民族境界 (17)	
3 アイヌらしさ (18)	
3 伝統的イオマンテについて.....	20
1 イオマンテの世界観 (20)	
2 イオルを管理する機能 (20)	
3 その他の機能 (21)	
4 白老について.....	23
1 白老川流域 (23)	
2 シラオイの歴史 (24)	
3 江戸末期のシラオイコタン (26)	
第1章 天覧のイオマンテ (明治14年) ——外交のツール	31
1 天覧のアイヌ熊祭り.....	32
2 外交のツール.....	34
3 自律的な社会集団.....	37
4 まとめ：村落共同体.....	39

第2章 観光のイオマンテ（昭和7年）——ビジネス戦略…………… 43

- 1 一般来観歓迎の熊祭り…………… 44
 - 1 盛大に執り行う（44）
 - 2 ビジネス戦略：ヌサの位置の変更（46）
- 2 大正～昭和初期の社会環境…………… 47
 - 1 人口比率（47）
 - 2 経済環境の急激な変化（48）
 - 3 自治組織の変容（49）
 - 4 観光ビジネスの始まり（52）
- 3 文化の担い手…………… 54
 - 1 神官機能（54）
 - 2 神との交渉（56）
- 4 まとめ：アイヌ民族としての自信と誇り…………… 57

第3章 「最後」のイオマンテ（昭和35年辺り）——蔑視と憧憬のジレンマ…… 63

- 1 「目覚めたアイヌ」とイオマンテ…………… 64
 - 1 観光イオマンテに対する嫌悪（64）
 - 2 「目覚めたアイヌ」によるイオマンテ（67）
- 2 アイヌ民族の近代化…………… 70
 - 1 アイヌ・コミュニティの近代化（70）
 - 2 近代化と和人化（71）
 - 3 「アイヌ民族」共同体の誕生（74）
- 3 森竹竹市の葛藤…………… 76
 - 1 希望と挫折（76）
 - 2 和人エリートとの交流（78）
 - 3 生涯の敵——蔑視（80）
- 4 過去と現在の切り分け…………… 82
 - 1 内部からの改革努力（82）
 - 2 「アイヌ民族」への愛着（85）
 - 3 「目覚めたアイヌ」の結論（87）

5	まとめ：「アイヌ民族」を終わらせる	89
---	-------------------	----

第4章 イオマンテの再生(平成元～6年)——名誉の回復 93

1	白老流のイオマンテの復活	94
2	対外的な要請：「アイヌ民族」の存在証明	96
1	先住民族復権の潮流 (96)	
2	野村義一の民族運動 (98)	
3	「アイヌ民族」の有力なアイコン (102)	
3	対内的な要請：「アイヌ民族」の文化的連続性の補強	104
1	イオマンテを復活させることのハードル (104)	
2	文化の担い手としての自信を取り戻す (106)	
4	観光を介した「神官」機能の系譜	108
1	アイヌ観光の拡大 (109)	
2	観光コタンの移設 (111)	
3	政治機能の系譜——地縁型住民組織からテーマ型市民団体へ (115)	
5	まとめ：アイヌ民族ここにあり	118

終章 127

1	白老における「アイヌ民族」の変容	127
2	白老における「アイヌ民族」の未来	131

付録 明治以降の白老のイオマンテ記録一覧 (135)

参考文献 (144)

あとがき (153)

索引 (156)

白老における「アイヌ民族」の変容
——イオマンテにみる神官機能の系譜——

◎著者紹介

西谷内 博美 (にしやうち ひろみ)

民間企業での就業を経て大学院に進学。2001年シカゴ大学人文学研究科修士課程修了。

2005年法政大学大学院社会科学研究科修士課程修了。2012年法政大学大学院政策科学研究科博士後期課程修了。博士(政策科学)。現在、関東の諸大学にて非常勤講師。専門は環境社会学、開発社会学。

主な著作は『開発援助の介入論——インドの河川浄化政策に見る国境と文化を越える困難』(2016, 東信堂)、「廃棄物管理における慣習の逆機能——北インド、プリンダバンの事例から」(『環境社会学研究』15, 2009)。

白老における「アイヌ民族」の変容——イオマンテにみる神官機能の系譜——

2018年1月20日 初版第1刷発行

[検印省略]

*定価はカバーに表示してあります

著者 © 西谷内 博美 発行者 下田勝司

印刷・製本 中央精版印刷

東京都文京区向丘 1-20-6 郵便振替 00110-6-37828

〒113-0023 TEL 03-3818-5521 (代) FAX 03-3818-5514

E-Mail tk203444@fsinet.or.jp

Homepage <http://www.toshindo-pub.com>

Published by TOSHINDO PUBLISHING CO.,LTD.

1-20-6, Mukougaoka, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0023, Japan

発行所
株式会社 東信堂

ISBN978-4-7989-1450-3 C3036 ©2017 Nishiyauchi Hiromi